

第72回卒業証書授与式 校長式辞

野山を温かく照らす梅の花に続き、桜が今か今かと出番を待ち構えています。

本日ここに、島根県立三刀屋高等学校 第72回卒業証書授与式を迎え、ただ今、152名の皆さんに無事、卒業証書を渡すことができました。卒業生の皆さん、そして保護者の皆様、誠におめでとうございます。

皆様には、卒業式をこのような前例のない形で挙行せざるを得なくなったことを、心からお詫び申し上げます。また、晴れ姿を楽しみになさっていた地域の皆様や小中学校の先生方、旧職員、何より先輩たちの門出を同じ場所で祝いたいと願っていた在校生の思いは察するにあまりあるものです。卒業生の皆さんには、どうかその思いもしっかりと受け止め、栄えある三刀屋高校総合学科14期生として3年間を全うした誇りをもって堂々と巣立ってください。

私から皆さんには、一つだけ、ある言葉をもとにお話ししたいと思います。まるで今回のことを予測したような言葉ですが、私はこの1か月のうちに、数回出会い、深く心に刻みました。それは、「当たり前は当たり前ではない」という言葉です。

1度目は、先月、本校生徒がマイプロジェクトアワード県大会で自らのチャレンジを発表した時です。難病ALSを患う方々のため、自分にどんなことができるかを課題として、失敗を恐れず行動に移し、仲間の輪を広げていく姿を知りました。彼女の原動力となったのが、「当たり前は当たり前じゃない。一つ一つがありがたいのだ」という思いだったそうです。

2度目はつい先日の新聞記事です。約10か月の入院生活を経て退院した競泳の池江璃花子選手がこう語っていました。

「ここにいることが奇跡、生きてることが奇跡だという気持ちに変わりました」と。この言葉を裏返せば、19歳の若者を襲った絶望感と、そこから始まった治療の日々がどれほどすさまじいものだったかということです。迷いなく突き進んできた東京オリンピックという目標が見えなくなったときの闇の深さを思うだけで胸が痛みます。しかし、「次のパリを目指す」と明言した彼女からは、もう一つ、「人が目標を持つこと」の底知れぬパワーも教えられました。

皆さんは今年の生徒会誌をもう読みましたか。教職員、特に3年の先生たちからのメッセージには皆さんへの励まし、感謝、そして尽きせぬ愛情がこめられています。主任の馬庭先生の言葉に、私は9年前の光景を思い起こしていました。東日本大震災が起こった3月11日は卒業式シーズンであり、大学後期試験の前日でした。3年生担任だった私は、受験のため東へと向かっていた生徒たちに、がたがた震えながら電話をかけ続けました。学校に生徒たちの賑やかな声が響くこと、卒業しても必ずどこかで元気でいることに何の疑いもなかった自分が初めて味わった恐怖でした。

当たり前は当たり前ではない。

悔しいけれど、この世には人知を越えたことが起こりうる、先が見えない事態に遭遇することがある。努力だけでは解決できないことにぶつかって、つい投げ出したくなる時があるかもしれない。

しかし、皆さんは、いえ私たちは皆、何か役割を与えられてここに生きています。この「当たり前ではない奇跡」の上に、これからも共に道を探し、助け助けられながら歩いていきましょう。その中で味わうささやかな喜びや感動、互いにかけて温かい言葉が、きっと明日への力を与えてくれるはずです。皆さんにとって、長いようで短かった三刀屋高校での3年間は、この不確かな時代を生きていくための挑戦の連続であり、成長の積み重ねであったのだと私は信じています。

さあ、今日から三刀屋高校は皆さんの母校です。たとえ進む道は分かれても、ここで培った力と、結ばれた絆は、きっとあなた方を支えてくれます。

「さくらの花かげ 稲田の前」と校歌に歌われる美しいふるさとの景色を胸に、新しい世界に羽ばたいてください。

結びに、ひとことお礼を言わせてください。

この1年、それぞれの季節に最上級生が見せてくれた勇姿とはじける笑顔にどれほど元気づけられたかわかりません。何気ない日常の会話も楽しい時間でした。ありがとう。保護者の皆様、地域の皆様には、学校を支える仲間として、ときに卒業生としてご尽力くださいました。高いところからではございますが、ありがとうございました。

思いは尽きませんが卒業生の前途に幸多かれと祈り、私の式辞といたします。

令和2年3月3日

島根県立三刀屋高等学校
校長 倉崎千草